秦中・秦高在職中の想い出

秦野高校の思い出

武藤清司（英語）
（昭和60年～平成10年）

私が赴任した当時の秦野高校はまだ男子の数が多く、男子クラスでは夏になると上半身裸で授業を受ける生徒もいてバンカラな雰囲気が残っていた。「質実剛健」と「自由奔放」、この精神は部活動や勉強、学校行事でも大いに発揮され楽しい思い出が多い。文化祭で私のクラスがディスコをやった時、生徒たちはビールケースを何千個も集め格技場全体をディスコ会場にしてしまった。秦野駅の前に今でもドーナツショップがあるが夜の12時を過ぎてもこの店で生徒たちと準備の話し合いをしていたことを思い出す。文化祭の当日朝早く会場に行ってみるとクラスの男女ほぼ全員が格技場に寝ていた。みんな夜中に学校に来て準備していたのだ。夜中に学校に来るのが伝統のようになっていたので、教員も負けずに学校に泊まり込んで指導した。

また、第1回神奈川県高等学校女子駅伝大会が開催された時、私のクラスの佐藤美智子さんがチームのアンカーを走り見事一位でゴールを切った。クラスの生徒たちは秘密で新聞社に頼み、ゴールを切った瞬間の写真を譲ってもらいパネルにして翌朝のホームルームで佐藤さんに贈った。佐藤さんは大泣きに泣いた。大胆で繊細、優しい生徒たちであった。

当時柔道部は込山英雄先生の指導の下、黙々と厳しい練習をしていた。先生はまさに質実剛健の精神を体現する先生であった。私が赴任して2年目、団体県ベスト8に入り関東大会目前であった。この時のキャプテンが小嶌肇君であり、現在教鞭をとり柔道の指導者となっている。小嶌君の息子さんは現在小田原高校柔道部員として頑張っている。そしてこの小田高の柔道部監督が英雄先生の息子さんの込山清先生なのだ。清先生も秦高柔道部出身であり、県柔道界で中枢の活躍を見せている。

グラウンド劇場の一場

新倉光昭（国語）
（平成12年～18年）

3月に東日本大震災が発生し、その惨状を見聞するにつけ涙が流れてきました。発生から日が経過するごとに被害の実情が明らかになり、それにともなって個人、団体、企業からの支援表明がなされました。また、義援金やボランティア活動による多くの支援活動が今も継続されています。この支援表明や支援活動に多くの若者の姿があったことに、私は感動しました。

秦高に勤務していたある年、体育館での恒例となっていた各組対抗の応援合戦の時でした。開始前から空模様は怪しかったのですが、ある組が演技を始めてしばらくすると、雨が降り始め、激しい雨となり、あっという間にグラウンドは水たまりができるほどになってしまいました。雨中のグラウンドで演技者は飛びはね、でんぐり返り、腹ばいになり、仰向けになったりして、着衣は泥まみれになりました。それでも決められたメニューを仲間と心を通わせながら、演じていました。一方、他の生徒達も激しい雨に打たれるのも厭わず演技を見ていました。この後も雨が降り続く中、代わる代わる幾組かの演技が同じように行われました。私はこれらの情景を鳥肌が立つのを感じながら見つめていました。自分は高校時代にこれほど燃えるものを持っていなかったとも思いました。

平成12年から秦高に勤務しました。それは卒業して36年後のことです。そして教員生活最後の6年間を母校で送ることになり、平成18年に定年退職しました。今は日々気ままな生活をしていますが、東日本大震災からの早い復興が気に掛かっています。その復興の支援活動に携わる若者達と、あの雨中での応援合戦の秦高生達の姿とが重なるのです。若者達の精神と活力とに敬服します。